

だけに讀みがひもあるが、見なれぬ固有名詞の類出は此の方面に常識の乏しい讀者を混亂させる憾みがある。

ついで西藏史(石濱純太郎氏)は傳説時代より説き起して現代まで談話風に要約され、終りに印度支那及び南洋史の大要(宮崎市定氏)が附説されてある。

以上見た如く、大凡そ對支交渉に重きを置いたとはいへ各篇の叙述は區々である、加ふるに寫眞を入れる、あり入れざるあり、參考文獻を挙ぐるあり挙げざるあり、その體裁は各篇各様、門外漢をして言はしむればやゝ難解の感を免れぬが、これは編纂書の常として深く咎むべきでなく、寧ろ各篇各々その專家が得意の筆を揮つたものと見て内容の信頼性を高く評價せねばならぬ。ともあれ本書を上巻と併讀すれば支那周邊各地域の歴史的概観を一應會得すべく、その點に於て本書の價值は強調さるべきであらう。

(昭和十八年十二月、白揚社發行、定價參圓六拾錢)(北村敬直)

獨逸中世史の研究

増田四郎著

中世に關する文獻が日本においても最近際立つて多く現れてきた。このことは、歐洲においても前大戰から今次大戰にかけての期間に中世史研究が活況を極めてゐた事實と照し合せて注目すべき現象といはなければならぬ。而もそれら最近の文獻が概して少壯新進の學徒の勞作であり、學問的に問題性を孕んだ研究的なものも多く、一般に霸氣横溢し、且つ問題の取上方や視角において、それらの間におのづから或る種の共通性が存し、單なる個人

的興味だけに終つてゐないといふこともまた大いに注目すべき傾向であつて、それが假令未だ歐洲における學界の動きを反映する以上には出でてゐないものであるにしても、吾々としてはこれを以て頗る慶賀すべき傾向であるとしないうけにはゆかない。即ち中世史研究は最近確かに量において多いのみならず、質的にも動きつつあること、前進しつつあることを認めてよいのである。之等の諸文獻の中でも最も活潑な動きを示してゐるのは社會經濟史學の領域であつて、本書はこの分野において現れた最近の力作として特筆すべき著述であらう。

本書は五百數十頁にわたる大著で、而もその全卷が悉く、記述的なものでなくして研究的なものであるが故に、今茲に著者の主張や傾向を數行の間に概括的に言表はすことは困難であるのみならず、隅々まで行き渡つた著者の丹念な努力に對する冒瀆であるとも思はれる。然し本書の實質上の重點は明らかに目次の後半の部分、即ち都市及び商業史の部分に存し、わけても北歐商業圈の研究を中心として展開せられてゐるといふことは本書の最大の特質を形成するものと言つてよい。第二章「フランク王國の商業交易」以下第三章第四章はそれぞれ獨立の價值をもつた研究ではあるけれども性質の上ではいづれも後章に對する序論的意味をもつたものと解される。結局頁數の上からいへば本書の勢くとも五分の四は都市及び商業に關するものによつて占められてゐると曰つてよい。

即ち本書は獨逸中世史の中でも専ら社會經濟史の領域に關する

ものであり、また社會經濟史の中でも特に都市及び商業の側面に専らであつて、中世經濟の今一つの而も最も重要な領域である農業經濟については殆んど觸れられてゐない。而して商業は主として北歐商業園といふ形で取上げられ、從つて當然ハンザ都市及びハンザ商業が問題の中核を形成し、更にハンザ都市の中ではリュベツク市に最も大きな關心が寄せられ、リュベツク市に關する研究の深さにおいては全く他に類例を見ない獨自のものを出してゐることもまた本書の特色の一つに數へなければならぬところであらう。從つて近頃ドイツで八釜しい問題となつて來て居る東ドイツ植民運動の如き問題も、本書においては農業史の問題は一應除外せられて専ら都市發展史及び商業史の側面から考察せられてゐることも注目をおく點であらう。而して北歐商業園に關する研究が一九三〇年代においてローリツヒその他の研究によつて全く面目を一新し、獨り中世經濟史の一分野たるに止まらず、中世經濟の一般の本質構造に關する見解の全面的革新をさへ呼ぶことき眼醒しき結果を生ずるに至つたことは周知のところであらう。本書は今日の斯かる水準の上に立つて吾々を啓蒙するところ誠に多大であるといはなければならぬ。

本書の内容が著しく商業史に偏つてゐることは右の如くであるが、然しこのことは即ち本書が特色を有するといふことであつて缺陷を有するといふ意味ではない。それは正に本書が眞に學術書であるといふことの證據に他ならない。即ち本書は著者獨自の見識と多年の研鑽とによつて其處におのづから結晶し來つた重點的

體系を有してゐるのである。徒らに開口のみ廣くして與行のない凡俗の概説書と異なることは固より、研究論文の單なる集積でもなく、本書は一つの重點を核心として繰り擱げられた一種の體系を構成してゐる。而もその體系的存在といふことは、單に論文と論文との間に論理的な繋りがあるといふだけのものではなく、著者自身が體系に對する熾烈なる欲求と憧憬とを抱くものであることが行間において讀者に——少くとも私に——生々しく讀取られるものがあるのである。著者は個々の問題の究明に獻身するのみならず、體系に向つての良き意味での野心を抱いてゐる。この意味において私は若き新進の學徒である著者増田氏の將來における成長と發展とを期待して止まない。本書の第一章「文化連續性」の問題は即ちこの著者の持つ體系への止むに止まれぬ欲求を反映するものに他ならない。而して此の問題を検討するための現段階における手掛りとして、アンリ・ピレンヌとドブシュとを捉へたこともまた正鵠を得てゐる。唯ゲルマンの連續性を重んずるために「フラー」をドブシュと並置せしめたことには私としては多少疑問が存しないではない。フラーが提出した如き問題が現在起るべきであるといふことについては私も固より異存はない。然しフラーの一論文を以てドブシュと對置せしめることは、著者の重んずる實證性よりも稍々觀念に走り過ぎた感なしとしない。多少之と似寄つた事柄であるが、著者増田氏の該博なる文獻的知識は私の最も敬服するところであつて、眞に博搜精到、この點において教へられるところ誠に多く、恐らく専門家も初學者も共に本書

を座右に備へることによつて多大の指針と便益とを得ることは疑ないところである。唯その文獻の重んじ方において、稍々新しい文獻に重きを置き過ぎる嫌がありはしないかといふことが單に印象の上のことではあるけれども感じられる。著者は流石に上原教授の高弟として實證に長じその點本書はまた確かに一の異色を有するものであるが、その反面可成理論を含む問題を取扱ひながら比較的理論性に稀薄なこともまた慙を言へば稍々物足りない點である。然し之等はすべて要するに見解の相異に歸着する事柄かも知れない。固より本書の價值とは關係のない一の感想にすぎない。先に上原教授の「獨逸中世史研究」の現れた後において、更に増田教授の本書は東京商大における中世研究が着々とその業績を進めつつあることを示すものとして、吾々の敬意を愈々深くせしむるものといはなければならない。(昭和十八年十一月、日本評論社、A5、五三八頁、定價六圓八拾錢)(鈴木成高)

新井白石の世界地理研究

鮎澤信太郎著

さきに、「東洋地理思想史研究」「日本文化史上における利瑪竇の世界地圖」「鎖國時代の世界地理學」「大日本海―日本地理學史の研究―」の諸著作を昭和十五年以來發表し來つた著者が今また本著作を公刊するに至つたのは、倦むことを知らぬ著者の篤學の賜と謂ふべきである。

本書は、書名に冠する新井白石の世界地理研究の外に、附録論文として、一、藤元良の和蘭產物圖考について、二、橋本宗吉の

「噶蘭新譯地球全圖」に對する山村昌永の批判、三、山村昌永の華夷一覽圖について、四、山片蟠桃の世界地理研究、五、地圖による謀略―北地定界の談判―を彙録してゐる。從つて著者も序文に述べてゐるやうに「前諸著の總體調査として」殊に「鎖鎖國時代の世界地理學」と名づけた方が本書の内容一般を概括するやうにも思はれる。が然し本書の題名となつた白石の研究が本書全一九八頁の中の七六頁を占め、且著者は之に最も多くの力を注いでゐるのである。

「新井白石の世界地理研究」は、鎖國時代の世界地理學に於ける元典的位置を占め、以後の世界地理研究に最も多く影響を及ぼした和蘭風土記、外國通信事略、殊に西洋紀聞、采覽異言について、白石が世界地理研究に進むに至つた事より筆を起し、その著述の内容、更にその研究の性格及び白石の立つ思想的地盤について述べてゐる。白石が鎖國の制約を受け自ら消極的ならざるを得なかつたにもかゝらず、諸説の參觀にこれ努め、批判探究して、却つて鎖國江戸時代を超えた世界地理認識を得るに至つた過程が、シドツチ引見より初めて從來に見られない興味ある且つ精細な考證の筆を以て進められてゐる。然し我が史學の發展の上に一エボツクをなした白石にして、他國を華とし我が國を夷とする程本朝に不忠無禮なること無しとした彼の史觀と、彼の地理思想との深きつながりを求めるのは或は本書の主眼を逸脱するものであらうか。

附録は各々その主題の由來、とその考證に及び更に之に批判を